

『一夜碧巖』 第三則 訳注

土屋 太祐

凡例は「『一夜碧巖』 第一則 訳注」（『東洋文化研究所紀要』 第一六七冊、二〇一五）に準ずる。

『一夜碧巖』 第三則 「馬祖日面仏月面仏」

【示衆】

示衆云：青天白日、不可指東劃西；時節因縁、亦乃応病為薬。且道放行即是？把住即是？試拏看。

〔訓読〕

示衆に云く、青天白日、東を指し西を劃すべからず。時節因縁、亦た乃ち病に應じて薬を為う。且く道え、放行するが即ち是か、把住するが即ち是か。試みに拏し看ん。

〔日訳〕

示衆に言う、青天白日のごとくはつきりしているところに、あれこれ言葉を重ねるわけにはいかん。祖師の公案もまた、病に応じた対処療法でしかない。さて、肯定で行くのがよいか、否定で行くのがよいか。それでは提起してみよう。

〔注釈〕

○この示衆は、張本で第四則冒頭に付せられる。

○青天白日、不可指東劃西二「青天白日」は、目の当たりにはつきり存在しているものの喩え。「指東劃西」はあれこれ指し示すこと。張本には「不可更指東劃西」とする。真理はそこに包み隠さず現れ出ている。このうえ、あれやこれやと言葉の次元で説明を加えてはいけない。『舒州龍門仏眼和尚普說語録』、「祖師の道は青天白日の如きに相い似たり。什麼なんの為にか人有りて路に迷う。久立。」(『古尊宿語録』卷三三、中華書局、一九九四、六二三頁)。「大慧普覺禪師語録」卷一七「礼侍者断七請普說」、「此の事は青天白日の如くして、元より障礙無きも、却って這些これらの雜毒に障却せられ、所以ゆえに法に於いて自在を得ず。」(T四七・八八二上)。「臨濟錄」示衆、「一般の好悪を識らざる禿奴有りて、即ち東を指し西を劃し、好きよ晴れ、好き雨、好き灯籠露柱という。你看なんじよ、眉毛幾茎か有る。」(山石波文庫、一九八九、九三―九四頁)。「景德伝灯録」卷八・南泉章、「師、方丈に在りて杉山と火に向かう次で、師云く、『東を指し西を指すを用いず、直下に本分事もて道い來れ。』杉山、火箸を挿して叉手して立つ。師云く、『是かくの如しと雖然いひも、猶お王老師に較なうこと一線道。』」(禪文化研究所、一九九〇(以下、禪文研本)、一一八頁上―下。入矢義高監修、

景德伝灯録研究会編『景德伝灯録』三、禪文化研究所、一九九三、二二一—二二二頁参照。

○時節因縁、亦乃応病為薬。祖師の悟境が表れた公案も、対処療法の方便でしかない。「時節因縁」は仏性が現前する決定的な時機。また、そこから転じて、悟境が表れた古人の因縁を指すこともある。「亦乃応病為薬」は、張本に「亦須応病与薬」に作る。「為」も「あたえる」。「病に應じて薬を与う」とは、機根に應じて方便説法すること。北本『涅槃経』師子吼菩薩品、「乳中に酪有り、衆生の仏性も亦復た是の如し。仏性を見んと欲さば、应当に時節形色を觀察すべし。是の故に、我の『一切衆生悉有仏性』と説けるは、実に虚妄ならざるなり。」(T一・五三二上)。以下は「時節因縁」を古人の機縁とする例。『禪林僧宝伝』卷一二・薦福古伝、「僧曰く、『何等の語句・時節因縁か是れ玄中玄。』古曰く、『如えば外道、仏に問う……此等の因縁、方便門中に以て玄極と為す。』(柳田聖山・椎名宏雄共編『禅学典籍叢刊』第五卷、臨川書店、二〇〇〇、三七頁上)。「維摩詰所説経」仏国品、「大医王と為りて、善く衆病を療やし、病に應じて薬を与え、服行することを得せしむ。」(T一四・五三七上)。「大慧普覚禪師語録」卷二〇「示真如道人」、「如上の所説は、乃ち一期の応病与薬なるのみ。若し実法の会を作さば、又た却つて不是なり。古人云く、『月を見れば指を觀る休かれ、家に帰れば程を問うを罷めよ』と。」(T四七・八九五上—中)。

○放行即是？把住即是？張本は「放行好？把定好？」に作る。意味するところは同じ。「放行」は通行を許可すること。そこから、すべてを肯定すること、個物がそのまま円成することを認める立場。「把住」「把定」はしっかりとつかまえること。そこから、究極的絶対的な立場に立つて一切を否定すること。ここでは上文を承け、懇切な接化を行ったとしても、それらは方便説法にすぎぬが、さりとて、絶対の真理に立てば、いかなる方便を施す余地もなくなる、さてどうしたものか、と問いかける。『圓悟語録』卷八、「其れ把定するや、乾坤色を失い、日月光無く、尽大地の人、

喪身生命す。其れ放行するや、巖谷光を生じ、森羅顯煥し、長に随い短に随い、有に随い無に随い、処処皆な真にし
て頭頭に露現す。且く道え、把住するが好きか、放行するが好きか。」(T四七・七五一上)。

【本則】【著語】

拳。馬大師不安。「這漢漏逗不少。／帶累別人去也。」

院主問：「和尚近日尊位如何？」〔四百四病一時発。／仁義道中。／三日後不送亡僧是好手。〕

大師云：「日面仏、月面仏。」〔可煞新鮮。／養子之縁。〕

〔訓読〕

拳す。馬大師安らかならず。「この漢、漏逗すること少なからず。／別人を帶累し去れり。」

院主問う、「和尚、近日尊位如何。」〔四百四病、一時に発す。／仁義道中。／三日後に亡僧を送らざれば是れ好手。〕

大師云く、「日面仏、月面仏。」〔可煞だ新鮮なり。／養子の縁。〕

〔日訳〕

提起する。馬祖大師が病気になるれた。「このオヤジ、なんたる無様。／人を巻き添えにしよる。」

院主が尋ねた、「和尚様、近ごろ、お加減はいかがでしょう。」「あらゆる病がいつぺんに出た。／浮世の習い。／三日持たせられれば立派なものだ。」

馬祖大師いわく、「日面仏、月面仏。」（なんともきれいなお言葉で。／老婆心切の説法だ。）」

【注釈】【本則】

○この話は『天聖広灯録』巻八・馬祖章による。『祖堂集』巻一四・馬祖章にも見え、そこでは遷化の前夜の出来事とする（中華書局、二〇〇七、六一七頁）。『景德伝灯録』には録さない。「不安」は四大不調。病気になること。『天聖広灯録』巻八・馬祖章、「師、貞元四年正月に於いて、建昌石門山に登り、林中において経行し、洞壑平坦にして、峰巒秀拔なるを見て、侍者に謂いて曰く、『茲は吉祥の所、乃ち吾が終焉の地なり。』既にして疾を示す。院主問う、『和尚、近日尊候如何。』師云く、『日面仏、月面仏。』二月一日に至り、沐浴し加趺して化す。」（柳田聖山主編『禅学叢書』之五、中文出版社、一九七五、四〇八頁上―下）。

○院主問：「和尚近日尊位如何？」院主は寺院の事務を取り仕切る役職。監寺、監院ともいわれる。「尊位」、「雪竇頌古」および下段本則評唱も同じ。張本、『天聖広灯録』等には「尊候」とする。

○日面仏、月面仏ともに『仏名経』に出る。日面仏は寿命一千八百歳の仏、月面仏は寿命一日一夜の仏とされる。菩提流支訳『仏説仏名経』巻七、「彼の勝声世尊を過ぐれば、復た仏有り、月面と名づく。彼の月面仏、寿命は一日一夜たり。月面世尊を過ぐれば、復た仏有り、日面と名づく。彼の日面仏、寿命は千八百歳を満足す。」（T一四・一五四上）。

【注釈】 【著語】

○這漢漏逗不少^レ馬祖が病になつたことを指して、すでに第二義に落ちた方便だと揶揄する。「漏逗」の語の由来ははっきりしないが、「逗」にも口語の用法として「漏らす」意があり、語の性質としては同義複詞と見てよいようである。張相『詩詞曲語辭匯積』「逗(四)」の条、「逗、猶お透のごときなり、露のごときなり。」(中華書局、一九五五、二一七頁)。宋翔「趙州禪師与『十二時歌』」、「名作欣賞」二〇一三年第五期、一〇二頁参照。ここから「疎漏する」「なおざりにする」、さらに「粗雑である」「粗忽をする」「手抜きする」等の意を表す。第一則【本則評唱四】では「秘密を漏らす」、第二則【頌評唱二】では「真理の消息を漏らす」と解したが、これらは不適当であり、改めて上記の意味で解釈されるべきである。本稿で以前の説を撤回し訂正する。また第一則訳注に引いた『諸録俗語解』の解釈も成立しがたいように思われる。

祁偉「趙州從諗『十二時歌』中的『漏逗』」(『新国学』第一卷、二〇一五)は、「漏逗」の最も早い用例が趙州「十二時歌」に現れることを指摘する。『趙州録』卷下「十二時歌」、「鷄鳴丑、愁い見る、起き来^まつて還た漏逗たるを。裙子^{くんす}褌^{へんえ}衫^{ひた}は箇^{ひと}つ也無く、袈裟の形相のみ此^{こゝ}此^{こゝ}か有り。」(『古尊宿語要』卷一、柳田聖山主編『禅学叢書』之一、中文出版社、一九七三、五四頁上)。祁偉は、ここに見える「漏逗」は禅林用語となる前の一般用語であり、「衰敗、破敗、窘迫、狼狽」、つまり「衰え果てた、困り果てた」等の意味であるとし(二七頁)、さらに「趙州の後、『漏逗』は普通用語から固有の禅林用語へと発展し、しばしば『漏逗し了^おれり』のように使って、『するべきでないことをする』『言うべきでないことを言う』などの意を表して、仏法を解釈しようとする行為を批判するようになった。『疎忽』『疎漏』あるいは『人を困らせることをする』と訳することができる」(二八頁)、「『漏逗』の語は、禅籍以外での出現頻度は決

して高くなく、北宋末および南宋の文人の別集に集中している。これは『漏逗』が禅林の通用語となった後に、文人集団に影響を与えた結果と思われる」（二九頁）とする。いま、「漏逗」の個別的な用例に関する解釈の妥当性については検討しないが、もっとも古い趙州「十二時歌」の用例が一般用語としての用法を示し、「秘密を漏らす」等の意味によって解釈できないこと、またこの語がまず禅林で定着した後に文人集団に影響を与えたことについて、祁偉の説は妥当と考える。

禅籍において、この語はしばしば第二義に落ちることを揶揄する文脈で用いられる。「漏逗」のまともった使用が確認される最も早い作品群の一つが圓悟克勤の語録、評唱であるが、以下のような使用例が見られる。張本『碧巖録』第二一則・本則評唱、「見ずや、巖頭道く、『常に未だ開口する已前を貫ばば、猶お些子に較えり』と。古人の機を露す処、已是に漏逗し了れり。」（T四七・一六二上）。張本『碧巖録』第七四則・頌評唱、「古人道く、『鑑は機先に在り、一捏を消いず』と。所以に衲僧家は尋常、須是らく格外に向いて用いて、始めて本分宗師と称するを得。只だ語言に扱らば、未だ漏逗を免れず。」（T四七・二〇二中）。『圓悟語録』卷一〇、「這裏に到りては、徳山に棒有りて、仏の来ると祖の来るとを論ぜず、一例に行遣す。臨済に喝有りて、仏の来ると祖の来るとを論ぜず、一例に施呈す。若し棒下に向いて見ば、未だ瞞肝たるを免れず。若し喝下に向いて薦らば、更に是れ漏逗なり。」（T四七・七五八下）。「瞞肝」は「瞞肝」の誤り、「顛預」とも書き、ほんやりしていることを表す。「一喝されてやと得たような悟りは、いかげんなものだ。」圓悟の師五祖法演には次のような用例がある。『法演禪師語録』卷上、「上堂して云く、『三七日中に於いて如是の事を思惟す。釈迦老子、半夜に城を逾え、直に雪山に往くは、早に是れ漏逗すること少なからず。更に箇の什麼をか思惟せん。』便ち下座す。」（T四七・六五〇下）。「三七日中に於いて……」は『法華経』方便品の

語で、梵天勸請の故事において仏が法の説きがたいことを思惟していたことを指す。今さらそんなことを考えても、求めるべき仏法が有ると思つて出家した時点で、すでに手抜きかりしてしまつてゐるではないか。また後代の例であるが、明代の鐮續『霏雪録』巻下、「或るひと、予に唐宋人の詩の別を問う。余、之に答えて曰く、『唐人の詩は純、宋人の詩は駁……唐詩は縝密、宋詩は漏逗……』」（四庫全書本、二二張右）。

○帶累別人去也ニ太田辰夫「祖堂集」語法概説」は、「去」は結果・実現の語氣を表し、しばしば「也」と連用して、おおよそ「結果（未来）」「完了」「反問」の三つの意味を表すとする（『中国語史通考』、白帝社、一九八八、二一八—二一九頁）。ここでは「結果（未来）」に相当する。他人を巻き込むことになつてしまふ。馬祖の病が以下一連の問答を引き起こすことに注意を向けさせる。『上蔡語録』、「温公初め起おこりし時、伊川を用いんと欲す。伊川曰く、『人を帶累し去る裏うら……』」（朱傑人・嚴佐之・劉永翔主編『朱子全書外編』第三冊、華東師範大学出版社、二〇一〇、五頁。呂叔湘「積景德伝灯録中在、著二助詞」、『呂叔湘文集』第二卷、商務印書館、一九九〇、六一頁参照）。

○四百四病一時発ハ「四百四病」はあらゆる病の総称。人体を構成する地水火風の四大それぞれに百一の病があるとされる。ここで病を發した主体は、馬祖とも院主とも理解しうる。馬祖を指すとすると、圓悟が馬祖の立場に成り代わつて、病が極めて複雑で癒しがたいと答えたもの。院主を指すとすれば、馬祖の病によつて、かえつて院主の方があらゆる煩惱を露呈させた、と解釈できる。もし後者の意とすれば、あるいは、「一切衆生病やまひむを以て、是の故に我病やまひむ。若し一切衆生の病滅せば、便ち我が病滅す」（T一四・五四四中）等とする『維摩經』文殊師利問疾品の内容を踏まえるか。この場合、馬祖の病を、院主の病を対治するための方便と見なしていることとなり、前句の著語に馬祖の病をある種の方便、あるいは「人を巻き添えにする」としてゐることも対応する。

○仁義道中「仁義の道において」の意。世俗の礼儀においてはこのようにするべきだ。院主の質問は型通りの挨拶をしていただけだ。『景德伝灯録』卷九・瀉山章、「師、淨瓶を過して仰山に与う。仰山、接らんと擬するに、師却つて手を縮めて云く、「是れ什麼ぞ。」仰山云く、「和尚還た箇の什麼をか見る。」師云く、「若し恁麼くんば、何ぞ更に吾に就きて覓むるを用いん。」仰山云く、「此の如しと雖然も、仁義道中に和尚の与に瓶を提ち水を掣るは、亦た是れ本分の事ならん。」師乃ち淨瓶を過して仰山に与う。」(禪文研本、一三五頁上―下。入矢監修『景德伝灯録』三、二六一―二六二頁参照)。「法昌倚遇禪師語録」、「哲首座來る。師云く、「山深く路遠し、何ぞ訪及することを煩わせん。」哲云く、「仁義道中には、分外為らず。」(Z 二二六・四八一下)。「雲門広録』卷下、「師因みに喫茶し了わりて云く、「什麼人か蓋子を接る。」僧有り便ち接る。師云く、「村裏の老翁、冬至を拝す。」对うる無し。代りて云く、「祇だ仁義を行いが為に、却つて禍を招きて身に及ぼす。」(T 四七・五七〇中)。

○三日後不送亡僧是好手「三日後に馬祖がまだ死んでいなければ、院主はやり手だ。馬祖の病はそれほど重い。これもまた上の著語「四百四病一時発」と同様、院主の病を指すとも解しうる。その場合、この一句で露呈した院主の病を三日以内に治すことができれば、馬祖は大したやり手だ、の意となる。

○可煞新鮮「新鮮」は言葉の新奇で鮮やかなことを形容する。馬祖の「日面仏、月面仏」という、一見、難解に見える言葉に対し、なんとも手の込んだ華美な言葉よとからかう。『景德伝灯録』卷一五・投子大同章、「師、衆に謂いて曰く、「汝ら諸人、這裏に來りて、新鮮の語句、攢華の四六を覓めんと擬し、口裏に道うべきもの有らんことを貴す。」(禪文研本、二九一頁上。景德伝灯録研究会編『景德伝灯録』五、禪文化研究所、二〇一三、四八八―四八九頁参照)。

『景德伝灯録』卷二・清化山師訥章、「問う、「如何なるか是れ西來意。」師曰く、「可殺だ新鮮なり。」(禪文研本、

四三二頁上。

○養子之縁ニ「養子之縁」は子を養う手だて。馬祖の言葉は方便の立場からの懇切なご説法だ。芳澤勝弘「岩波文庫版『碧巖録』簡記」、『禪学研究』第七六号、一九九八、一一六一—一八頁参照。

【本則評唱】

馬大師不安。院主問：「和尚近日尊位如何？」大師云：「日面仏、月面仏。」祖師若不以本分事相見、如何得此道光輝！這個公案，若知落処，便可舟霄独歩；若不知落処，往往枯木巖前蹉路去在。若不是本分人，到這裏，須是有驅耕夫之牛，奪飢人之食底脚手，方見馬大師為人処。

如今多有人道：「馬大師接院主。」且勿交涉。如今衆中多錯會，努眼云：「在這裏！左眼、右眼便是日面仏、月面仏。」有甚广交涉？驢年也不会。只如馬大師如此道，意在什广処？有這：「点平胃散一貼。」有什广交涉？到這裏，作广生得平穩去？所以道：「向上一路千聖不伝，學者劣形如猿捉影。」

只如這「日面仏、月面仏」，極是難見。雪豆到此亦難頌。却為它見得透，用尽平生工夫，直下去注他。諸人，要見雪豆广？看取下文。

【訓読】

馬大師安らかならず。院主問う、「和尚、近日尊位如何。」大師云く、「日面仏、月面仏。」祖師、若し本分事を以て相見せざれば、如何が此の道の光輝することを得ん。這個の公案、若し落処を知らば、便ち丹青を独歩すべし。若し

落処を知らざれば、往往にして枯木巖前に路を躓え去るなり。若し是れ本分の人にあらざれば、這裏に到りては、須臾はかく耕夫の牛を駆り、飢人の食を奪う底の脚手有りて、方めて馬大師の為人の処を見ん。

如今多く人有りて道く、「馬大師は院主を接す」と。且く交渉勿し。如今、衆中多く錯り会し、努眼して云く、「這裏に在り。左眼・右眼は便ち是れ日面仏・月面仏なり」と。甚麼の交渉か有らん。驢年にも也た会せじ。馬大師の此の如く道うが只如きは、意、什麼処にか在る。有る這は「平胃散一貼を点ぜよ」と。什麼の交渉か有らん。這裏に到りては、作麼生が平穩を得去る。所以に道く、「向上の一路は千聖も伝えず。学者の形を勞すること、猿の影を捉えんとするが如し」と。

這の「日面仏、月面仏」の只如きは、極是めて見難し。雪竇も此に到りては亦た頌し難きも、却つて它見得透せるが為に、平生の工夫を用い尽し、直下に去きて他に注す。諸人、雪竇を見んと要すや。下文を看取せよ。

〔日訳〕

馬大師が病氣になられた。そこで院主が尋ねる、「和尚様、近ごろ、お加減いかがでしょう。」大師いわく、「日面仏、月面仏。」禪門の祖師が真正の手段を用いなければ、どうして禪の道を輝かすことができようか。この公案、勘どころが分かれば、天空を独歩できるが、分からなければ、道を間違えることになろう。もし本格的の修行者でなければ、ここに至っては、農夫の牛を追い払い、飢えた人の食を奪い取るほどの荒療治を施して、はじめて馬大師の教えが分かるというものだ。

近頃は、「これは馬大師が院主を接化した一期の方便だ」などと言う者も多いが、まあ、的外れだ。また、今どき

の大衆の中には、勘違いをして、目を見張らせては、「ここにございます。左目・右目がそれぞれ日面仏・月面仏です」などと言う手合いも多い。一体、何の関係があるというのか。このようでは、いつまでたつても分かるまい。馬大師がこのようにおっしゃったその心は、一体どこにあるのか。ある者は「胃薬を一服煎じて参れ」などと言うが、これもとんちんかん。さて、どうすれば落ち着きどころを得られよう。だから言うのだ、「ひとつ上の路は、いかなる聖人も伝えられぬ。修行者の骨折るさまは、まるで猿が月影を追いかけるよう」と。

この「日面仏、月面仏」はまことに見難い。あの雪竇和尚も、ここに至っては容易に頌を付けられぬ。だが、そこは徹見しておればこそ、日頃の修行の成果を出し尽くして、ずばりと注した。諸君、雪竇和尚の意を知りたいか。ならば、次をよく見るがよい。

〔注釈〕

○祖師若不以本分事相見、如何得此道光輝二「本分事」は、本来面目、根本の真実。ここでは馬祖の「日面仏、月面仏」を（容易には理解しがたい、しかしだからこそ）本質的な接化とし、このような手並みがなければ、真の道が発揮されることはない、と言う。

○若知落処、便可舟霄独歩二「舟」は「丹」の写誤、「訓読」以下で改める。「丹青」は天空。ここの勘所が分かれば、一人天空を行くがごとく、自由自在となろう。「圓悟語録」卷一二、「若し悟得せば、以て丹青に独歩すべく、別人の処分を受けず。若し未だ恁麼かくのてき田地に到らざれば、管取かならずや人に羅籠せられん。」(T四七・七六八下)。

○枯木巖前蹉路去在二同安常察『十玄談』の最後の一首「正位前」の一句、「枯木巖前に差路多し、行人此こゝに到らば

「尽く蹉跎す」(『景德伝灯録』卷二九、禪文研本、六一三頁上)による。本来、「枯木巖」は「正位」、つまり事に對する理の位を表し、一句としては「無差別の境地に安住して、現実の多様性を見失い、道を誤る」という意味であつたと解される。ただし本文では、そこまでの意味を読み取ることはできず、「肝心なところで道を間違える」というほどの意で使われている。『十玄談』にはいくつかの異本があり、この詩の題名を「一色」、「一色過後」とするものもある。黄釋勲『宋代禪宗辞書《祖庭事苑》之研究』(仏光文化事業有限公司、二〇一一)第六章参照。

○若不是本分人 張本に「若是本分人」とする。「本分人」は自己の本来性に立脚して生きる人。真正の禪僧。

○驅耕夫之牛、奪飢人之食底脚手 學人が抛り所とする情解を徹底的に断ち切る接化の手段。『法演禪師語録』卷下、「上堂、挙す。古人道く、『夫れ善知識と為らば、須是らく耕夫の牛を驅り、飢人の食を奪うべし。耕夫の牛を驅りて、他をして苗稼滋盛ならしめ、飢人の食を奪いて、他をして永えに飢虚を絶たしめん。』……既に其の牛を驅るに、什麼の為にか却つて苗稼滋盛なるを得。既に其の食を奪うに、什麼に因つてか永えに飢虚を絶する。者裏に到りては、須是らく耕夫の牛を驅り、飢人の食を奪う底の脚手有るべし。便ち与に撈一逼し、趕いて結角の処に走り到らしめて、便ち好し、伊に向いて『福は重ねて受けず、禍は単行せず』と道うに。」(T四七・六六三上。ここにいう「古人」は雪竇重頭の法嗣、天衣義懷。『建中靖国統灯録』卷五・義懷章、Z一三六・八九下―九〇上参照)。『圓悟心要』卷上「示裕書記」、「直饒い見、仏と斉しきも、猶お仏地の障り有り。是の故に従上来、棒を行じ喝を行す。一機一境、一言一句、意は鉤頭に在り、只だ独脱を貴び、切に依草附木を忌む。所謂る耕夫の牛を驅り、飢人の食を奪うなり。若し是の如くならざれば、尽く是れ泥団を弄ぶ漢。」(Z二二〇・七〇三下)。

○如今多有人道：「馬大師接院主。」且勿交渉 近頃はこれを、「院主に對する一時的な接化の方便」として安直に理

解する者が多いが、誤りである。

○如今衆中多錯會、努眼云：「在這裏！左眼、右眼便是日面仏、月面仏。」〓「努眼」、張本に「瞠眼」に作る。この当時よく見られた「作用即性」的理解の一種。第一則【本則評唱三】を参照。近頃の修行者の中には間違つた考えを持つものが多く、目を見開いては、「ここ（この目の中）に（仏性の作用が）ある。左右の目がそれぞれ日面仏・月面仏だ」などと言う。

○有這：「点平胃散一貼」〓「有這」、張本に「有底云」に作る。「這」は「者」の誤りか。当時、「者箇」を俗に「這箇」と表記していたことが知られる。『増修互註礼部韻略』卷三・馬韻・「者」の条、「凡そ此箇を称して者箇と曰う。俗に多く這字を用う。」（四庫全書本、七三張左）。「点」は薬を煎じること。「平胃散」は胃薬。「一貼」は量詞で一服。張本は「一盞」に作る。「馬大師の具合が悪いらしい、胃薬を一服持つて来てやれ。」ことさらな禪的理解を排した、ごく日常的な返答。この日常的な営為こそ禪である、という主張を含む。この当時流行していた無事禪的理解の一種であろう。『林間録』卷上、「予、湘山雲蓋に在りて、夜、地炉に坐し、帔を以て首を蒙う。夜久しくして、僧の相い語るを聞くに、曰く、『今、四方皆な臨済の児孫は平実禪を説くと誇る。例に随いて虚空中に筋斗を抛すべからざるなり。悟を求めしむと須も、箇の什麼をか悟る。古人悟らば則ち土を握りて金と成す。今人の悟を説くは、正に是れ鬼を見る。彼は皆な狂解未だ歇さず。何の日に我家に到り去らん。』僧曰く、『只如ば趙州に問う、『承聞く、和尚親しく南泉に見ゆると、是なりや。』答えて曰く、『鎮州に大蘿葡頭を出だす。』此の意、如何。』其の僧笑いて曰く、『多少と分明なり。豈に独り臨済下のみ此を用いて人を接せんや。趙州も亦た老婆なることは是の如し。』予戯れて之に語りて曰く、『這の僧、問端未だ穩やかならず。何ぞ曰わざる、『如何なるか是れ天下第一等の生菜』と。答えて曰く、

「鎮州に大羅葡頭を出だす。」平実にして更に分明なり。彼、南泉に見ゆるを問うに、而して此を以て対うるは、却つて虚空中に筋斗を打すと成る。』聞く者、伝えて以て笑と為す。」(Z一四八・六一一上―下)。

○向上一路千聖不伝、学者劳形如猿捉影。盤山宝積の語。その一つ上の道は、いかなる聖人も伝えない。この本分の境地は伝えようがない。『景德伝灯録』卷七・盤山章、「若し即心即仏と言わば、今時、未だ玄微に入らず。若し非心非仏と言わば、猶お是れ踪を指す極則なるのみ。向上の一路は千聖も伝えず。学者の形を勞すること、猿の影を捉えんとするが如し。」(禅文研本、一〇七頁上。入矢監修『景德伝灯録』三、三五―三九頁参照)。

【頌】著語

日面仏、月面仏。(開口見胆。／両鏡相照、於中無縁。)

五帝三皇是何物？(太高生。／莫謗伊好。／可貴可賤。)

二十年来曾苦辛。(自是你落草。／不干山僧事。／唾子喫苦瓜。)

為君幾下蒼龍窟。(何消恁广？／莫錯用心。／莫道無奇特事好。)

屈。(愁人莫向愁人説、説向愁人愁殺人。)

堪述！(向阿誰説？)

明眼衲僧莫輕忽。(更須子細看。／咄。／且退後。)

〔訓読〕

日面仏、月面仏。「口を開かば胆見ゆ。／両鏡相い照らし、中に於いて縁無し。」

五帝三皇、是れ何物ぞ。「太だ高生し。／伊を誇ること莫くんば好し。／貴ぶべく、賤しむべし。」

二十年来會て苦辛し、「自らはれ你落草す。／山僧の事に干からず。／唾子、苦瓜を喫らう。」

君が為に幾たびか下る蒼龍の窟。「何ぞ慙麼くなるを消いん。／錯りて心を用うること莫かれ。／奇特の事無しと道

うこと莫くんば好し。」

屈、「愁人は愁人に向いて説うこと莫かれ、愁人に説向わば人を愁殺す。」

述ぶるに堪えんや。「阿誰に向いてか説う。」

明眼の衲僧、軽忽にすること莫かれ。「更に須らく子細に看るべし。／咄。／且く退後け。」

〔日訳〕

日面仏、月面仏。「この一言にすべてが丸出し。／二面の鏡が照らし合い、間には何も映らない。」

三皇五帝が何だというのだ。「取りつく島もない。／悪口を言うなよ。／高貴でもあり、卑賤でもあり。」

これまで二十年ものあいだ苦心慘憺し、「お前が勝手に落ちぶれただけ。／わしにはかかわりのないこと。／言うに

言われぬ苦しみ。」

幾度もこの公案の要諦を捉えようとしてきたのだ。「何をそこまですることがある。／思い違いするな。／ここに何

事もないと思わぬがよい。」

くやしい！「愁える者は愁える者に言わぬがよい、いたく愁いを増すばかりぞ。」

言葉にならぬ。「誰に言うつもりか。」

まなこある禪者よ、ここをおろそかにしてはならぬぞ。「まだまだ注意深く見てとらねばならぬ。／＼こら！／＼まずは一歩下がって足元を見よ。」

【注釈】【頌】

○五帝三皇は何物Ⅱ評唱にも見える通り、禅月貫休の詩にもとづく。貫休の詩では「無知のために三皇五帝が何者であるかも知らない」の意であるが、ここでは「三皇五帝すら眼中に置かない」の意で用いられている。【頌評唱】参照。これまで、「日面仏、月面仏」とはいかなる意味か、探求を続けてきたが、理解しようとする事自体が誤りであった。いまや「日面仏、月面仏」も、三皇五帝も重んじることはない。三皇五帝は、古代中国の伝説上の帝王。具体的に誰を指すかについては諸説ある。「何物」は二字で「なに」の意。

○為君幾下蒼龍窟Ⅱ入矢義高・梶谷宗忍・柳田聖山『雪竇頌古』（『禅の語録』一五、筑摩書房、一九八二）が「君は、馬祖を指す」とするのに従う（二〇頁）。この「馬祖日面仏月面仏」の公案を解き明かすために、幾度も龍の住むねぐらに潜っては、究極の真理という宝珠を採ろうとした。雪竇が馬祖の言葉を解釈するため、試行錯誤したことを言う。海中の龍王が宝珠を持つとする伝説や比喻は仏典中にしばしばみられる。入矢ほか『雪竇頌古』では、仏典中の故事として『大智度論』巻一二に見える能施太子の物語を指摘する。類似のものとしては、ほかに、『生経』巻一「仏説璣珠著海中経」（T三・七五中―七六上）、『大方便仏報恩経』巻四・悪友品（T三・一四二中―一四八下）などを

挙げることもできる。また如来の智慧の喩えとして、六十卷本『華嚴經』卷三五に「娑伽龍王の如きは、四妙宝珠有り。密かに深宝藏に置きて、衆生は見る能う無し。端嚴にして方正、常に大海に住す。此の四摩尼に因りて、一切宝を生出す」とある（T九・六二四中）。中国の古典としては、『莊子』列禦寇篇に驪龍の領下に宝珠があるとする伝説がみられ、しばしば至高の法の比喩として用いられる。『莊子』列禦寇、「夫れ千金の珠は、必ず九重の淵にして驪龍の領下に在り、……」（『莊子集釈』、中華書局、一九六一、一〇六一頁）。『景德伝灯録』卷一八・大普玄通章、「僧問智度論」と『莊子』の故事を結びあわせ、「中国古来の東方青竜の説に擬したものであろう」とする。

○屈、堪述〓「屈」は、不当な目にあつて、悔しい思いをすること。「堪述」は反語で「語ることが出来ない」。これまで「日面仏、月面仏」の真意を探るなどという、やらなくともよいことをさんざんやった悔しさは、何とも言葉にできない。

【注釈】【著語】

○開口見胆〓口を開けば胆が見える。話が単刀直入で包み隠すところがない。雪竇の頌の第一句「日面仏、月面仏」は、本則の勘所をずばりと示している。『大慧語録』卷二二「示永寧郡夫人」、「妙喜、従来より実法の人に与うる無し。直是ちに款に抛つて案を結び、平生悟得する底を將つて、口を開かば胆を見、明白に直に人に説与く。」（T四七・九〇三下―九〇四上）。大慧『正法眼蔵』卷三、「我が遮裏は是れ海蚌禅、口を開かば便ち心肝五臓を見、差（羞の誤）珍異宝は都な面前に在り。」（柳田聖山・椎名宏雄共編『禅学典籍叢刊』第四卷、臨川書店、二〇〇〇、一三〇頁下）。

唐代語録研究班『正法眼蔵』卷三下末示衆記注、『禪文化研究所紀要』第二七号、二〇〇四、一〇六一—一〇頁参照)。

○両鏡相照、於中無縁Ⅱ張本では「如両面鏡相照、於中無影像」とする。二つの鏡が相對して、その間に何の像も現れないように、両者が通じ合っている。日面仏、月面仏が相對し、本分事が全現している。もしくは、「日面仏、月面仏」の句を通じて馬祖と雪竇が通じ合っている、とも解しうる。雪竇は馬祖の言葉そのまま頌に使ったが、それは馬祖と同じ境界に立ち、それをありのままに表現しているのだ。「縁」は「像」の誤りか。『一夜碧巖』第二四則・本則評唱、「這の老漢、它を會し、糸來線去、一放一收、互相いに酬唱す。両鏡相照らして、影象の觀るべき無きが如し。機機相副い、句句相投す。」(大拙校訂本、上一一五頁)。「圓悟心要」卷上「示普賢文長老」、「仏祖は以心伝心す。蓋し彼彼頓悟透脱し両鏡相照らすが如く、言象の拘らうる所にあらず、高く格量を超え、箭鋒相拄え、初めより異縁無し。」(Z二二〇・七〇九上)。語は『宗門統要集』卷四・湧山章に基づく(柳田聖山・椎名宏雄共編『禪字典 籍叢刊』第一卷、臨川書店、一九九九、八六頁下)。

○太高生Ⅱ雪竇のこの一句はあまりに人を寄せ付けない。三皇五帝という価値を否定する態度を、空無に徹した、あまりに高踏的なものと評する。「景德伝灯録」卷五・青原章、「(石頭希)遷、彼に至りて未だ書を呈せざるに、便ち問う、『諸聖を慕わず、己靈を重んぜざる時、如何。』讓曰く、『子の問は太だ高生し。何ぞ向下に問わざる。』」(禪文研本、七六頁上)。「圓悟語録」卷四、「一向に孤峰にて独り宿まり、雲霄を目視するは、宗風を埋没せずと雖則も、乃ち太だ高生きこと無からんや。一向に十字路口にて土面灰頭、物を利し機に応ずるは、自己を埋没すと雖則も、乃ち太だ屈辱生なること無からんや。」(T四七・七二九上)。

○莫謗伊好Ⅱ「謗伊」、張本に「謾他」に作る。「伊」は「五帝三皇」を指す。三皇五帝を馬鹿にするものではないぞ。

この一句のために『雪竇録』の入蔵が許されなかったことを踏まえての軽い揶揄。あるいは「伊」は雪竇を指すか。その場合、「雪竇の意を曲解してはいけない。『五帝三皇は何物』の一句を、文字通り三皇五帝を馬鹿にしたものとしてはいけないぞ」の意と解しうる。『宗門統要集』巻五・光孝慧覺章、「師云く、『先師実^まに此の語無し、和尚、先師を謗ること莫くんば好し。』」（『禪字典籍叢刊』第一巻、九五頁上）。

○可貴可賤^し 頌の「五帝三皇、是れ何物ぞ」の一句に答える形で、三皇五帝は高貴であるとしてもよく、卑賤であるとしてもよい、とする。三皇五帝は仮に現れたもので、それ自体に定まった価値はない。『保寧仁勇禪師語録』、「上堂す。杖を拈じて云く、『此は是れ雲門・臨濟・徳山・巖頭、一生用い尽くさざる底なるも、如今、保寧の手裏に在りては半分銭に直たらず。是の如しと雖然も、又也た貴ぶべく賤しむべし。且く道え、什処か是れ貴ぶべく賤しむべき。』杖を擲ち、下座す。」（Z二二〇・三六〇上）。

○自是你落草^し ともとも雪竇自身が勝手に落ちぶれていただけだ。「落草」は一般に山賊や盗賊に身を落とすことを言い、禪籍ではしばしば第二義に落ちることを表す。ここでは雪竇が「日面仏、月面仏」という語の詮索に憂き身をやつしてきたことをいう。『圓悟心要』巻上「示華藏明首座」、「達磨、梁に遊びて魏に入り、落草して人を尋ね、少林に向いて冷坐すること九年、深雪の中に一箇を覓め得たり。」（Z二二〇・六九八上）。

○不干山僧事^し 私にはかかわりのないことだ。上の著語と同趣旨で、雪竇が自らやっていたことだと突き放す。

○唾子喫苦瓜^し 唾が苦瓜を食べる。歇後語で、「苦くても言うことができない」「苦しさを伝えることができる」との意。雪竇は二十年間無駄な苦勞をしたが、それを訴えるあてもない。

○何消息^し どうしてこんなことをする必要が有ろうか。馬祖の真意を探ることなど、余計なことなのだ。

○莫錯用心モクサクウシン 間違つた考え方はするな。雪竇が馬祖の意を解釈しようとしたことを指して、そもそも考え方が間違っていると言う。あるいは、次の著語と同趣旨とすれば、聴衆に対し「そこに重要なものは何もない」と思っていないぞ、と注意を促したものだ。

○莫道無奇特事好モクダウモクイテシヨクニヨク 馬祖の真意を理解しようと、何度も解釈を試みたが、結局何もなかった。だからといって、そこに大切なものは何もないと思つてはいけない。

○愁人莫向愁人説シュウジンモクキョウシュウジンセツ、説向愁人愁殺人セツキョウシュウジンシュウシツジン 愁いある人が同じように愁いある人に訴えてはいけない。訴えたところで愁いを増すばかりだ。多くの人が雪竇と同じように馬祖の真意を探り、悔しい思いをしている。そのような人と言つたところで、詮ないことだ。下の【頌評唱】に「多少アマタの人、蒼龍の窟おほに向いて活計を作す」と言うのを参照。『景德伝灯録』卷二四・広徳周章、「僧問う、『承うけるに教に言える有り、『阿逸多は煩惱を断ぜず、禪定を修せず。仏は、此の人成仏すること疑い無しと記す』と。此の理い如何か。』師曰く、『塩又た尽き、炭又た無し。』曰く、『塩尽き炭無き時如何。』師曰く、『愁人、愁人に向いて道うこと莫かれ。愁人に向道いわば人を愁殺す。』」（禪文研本、四九九頁上）。

○向阿誰説キョウアタリセツ いったい誰に言うのか。頌に「述ぶるに堪えんや」、つまり、この悔しさは言葉にできないというのに対し、言えたところでいったい誰に言うつもりかとませかえす。

○更須子細看モリスシヨクシヨクミ しっかりと自らの眼で見とらねばならぬ。以下【頌評唱】の末尾に「須是スらく子細シヨクシヨクにして始めて得し」と言うのを参照。

○咄おんそく 軽忽おんそくにすること莫かれ」という雪竇の語を承け、学僧の自覚を促す。

○且退後ナシ 一歩下がって、わが身に即して見てとれ。下の【頌評唱】「須是自家退歩看、方始見得它落処ト」の

注釈を参照。

【頌評唱】

頌：「日面仏、月面仏。五帝三皇は何物？」神宗在位時、因此一頌、所以不入藏。雪豆先拈：「日面仏、月面仏」、一時拈了、却云：「五帝三皇は何物」、且道它意作广生？適来說了、也直下注它。所以道：「垂鉤四海只釣鯤鯨、格外高談為尋知識。」只此一句已了。

後面雪豆自叙他平生用心參禪處：「二十年来曾苦辛、為君幾下蒼龍窟。」似个什广？一似个入蒼龍窟裏尋珠相似。後來打破漆桶、將謂有什广奇特、元来只消个「五帝三皇は何物」。且道雪豆語話在什广處？須是自家退步看、方始見得它落處。引興陽問答三皇五帝因緣了、云：人多不見雪豆意、只管道諷国。若恁广会、只是情見。此乃禪月題《公子行》詩、云：「錦衣仙花手擎鶻、閑行氣貌多輕忽。稼穡艱難惣不知、五帝三皇は何物？」

雪豆道：「屈、堪述。明眼衲僧莫輕忽。」多少人向蒼龍窟作活計。直饒頂門具眼、肘下有符明眼衲僧、点破天下衲僧、到這裏也莫輕忽。須是子細始得。

【訓読】

頌、「日面仏、月面仏。五帝三皇は何物ぞ。」神宗位に在りし時、此の一頌に因りて、所以に藏に入れず。雪竇先ず「日面仏、月面仏」と拈じ、一時に拈じ了るに、却つて云く、「五帝三皇は何物ぞ」と。且く道え、它の意、作麼生。適来説き了るに、也た直下に它に注す。所以に道く、「四海に鉤を垂るるは只だ鯤鯨を釣らんとす。格外

の高談は知識を尋ねんが為なり」と。只だ此の一句もて已了れり。

後面に雪竇、他の平生心を用いて參禪する処を自ら叙す。「二十年来曾て苦辛し、君の為に幾か下る蒼龍の窟。」今の什麼にか似る。一に今の蒼龍窟裏に入りて珠を尋ぬるが似きに相い似たり。後來に漆桶を打破すれば、什麼の奇特か有らんと將謂いしに、元来只だ今の「五帝三皇是れ何物ぞ」を消うるのみ。且く道え、雪竇の語話、什麼処にか在る。須是らく自家ら退歩して見て、方始めて它的の落処を見得せん。興陽問答・三皇五帝の因縁を引き了りて、云く、人多く雪竇の意を見ずして、只管に道く、国を諷すと。若し恁麼く会せば、只だ是れ情見なるのみ。此れ乃ち禅月の題する「公子行」詩なり。云く、「錦衣仙花にして手に鶻を擎げ、閑行する氣貌に軽忽多し。稼穡の艱難惣て知らず、五帝三皇は是れ何物ぞ。」

雪竇道く、「屈。述ぶるに堪えんや。明眼の衲僧、軽忽にすること莫かれ。」多少の人、蒼龍の窟に向いて活計を作す。直饒い頂門に眼を具し、肘下に符有る明眼の衲僧、天下を点破する衲僧なるとも、這裏に到りては也た軽忽にすること莫かれ。須是らく子細にして始めて得し。

〔日訳〕

頌、「日面仏、月面仏。三皇五帝、なにするものぞ。」神宗皇帝が帝位にあられた時、この一首のために『雪竇語録』の入蔵が許されなかつた。雪竇はまず「日面仏、月面仏」と頌し、これで本則への批評は尽きているというのに、そのうえに「三皇五帝、なにするものぞ」と言う。さて、いかなる心か。さきほど説き終わったばかりだというのに、そのすぐ下に註釈をつけるとは、だから言うのだ、「釣り針を海に垂らすのは、大物を釣るため。常識を越えた議論

は良き友を求めるため」と。頌はこの一句で言い尽くされている。

その後で雪竇は、日ごろ専一に參禪した経験を述べている。「二十年の間、苦心慘憺し、君の為にどれほど蒼龍の巢窟にもぐったことか。」どうだろう、まさに蒼龍の巢窟に入つて宝珠を探し求めているようではないか。ところが、後に無明を打破してみると、何の素晴らしいものがあるかと思いきや、なんと、「三皇五帝、なにするものぞ」の一句で十分だったのだ。さて、雪竇は何を言っているのか。自己の本分事に立ち返つて参究して、はじめてその勘どころが分かるというものだ。(興陽清剖侍者の問答、三皇五帝の因縁を引用し終わってから、圓悟が云く、)人々はだいたい雪竇の真意が分からず、「この頌は国を諷刺している」とばかり言う。こんなものは俗情の見かたでしかない。この句は禅月貫休の「公子行」という詩によるものだ。「派手な錦衣を身にまとい、手には鶻はやぶさささげつつ、そぞろ歩きするさまは、軽薄なことこのうえない。野良の苦勞はつゆ知らず、三皇五帝は何ものか。」

つづけて雪竇は言う。「くやしい。言葉にならぬ。まなこのある禅者よ、おろそかにしてはならぬぞ。」多くの者が、「日面仏、月面仏」の裏にある「真意」に拘泥しておる。頭上に智慧の眼を具え、袖の中にお札ふだをしのばせるような禅僧、天下を見通すような禅僧であつても、ここで油断してはならぬ。必ずや綿密にせねばならぬぞ。

〔註釈〕

○神宗在位時、因此一頌、所以不入藏。○「神宗」は北宋の第六代皇帝、趙頊きよく。在位一〇六七—一〇八五。『不二鈔』には慧林宗本(一〇三二—一〇九九、法系は雪竇重顯—天衣義懷—宗本)が神宗に『雪竇語録』の入藏を請うたが、「五帝三皇是何物」の一句があつたため許されなかつたとする。ただし基づくところは未詳。

○適來説了、也直下注它。この公案の勘所は、さきほどの「日面仏、月面仏」の一句で言い尽くしているのに、そのすぐ下に「五帝三皇是れ何物ぞ」という注を付けている。

○垂鉤四海只釣鯤鯨、格外高談為尋知識。 「知識」は友人。四海に針を垂らすのは大魚を釣ろうとすること、常識を超えた議論をするのは己の理解者を求めてのことだ。雪竇の「五帝三皇是れ何物ぞ」の一句は優れた人物にしかり解できないことを言う。『圓悟心要』卷下「示禪人」、「是の故に、従上の人の一機を立て一言を垂るるは、之を『鉤を四海に垂るるは只だ獐龍を釣る』と謂う。箇裏こゝに到りては如之あれこれ若何を論ぜず。箭鋒相さい拵まえ、一撃して便ち過ぐることを要す。」(Z一二〇・七七三頁下―七七四頁上)。この一句は一般に梁山縁觀(生没年不詳、同安觀志嗣)の語とされるが、これを確認できる資料として最も古いものは、『五灯会元』卷一四・縁觀章である。いわく、「上堂、『鉤を四海に垂るるは、祇だ獐龍を釣る。格外の玄機は、知己を尋ねんが為なり。』」(中華書局、一九八四、八六四頁)。このほか、同様の言葉が承天智嵩(生没年不詳、首山省念嗣)の語録にも見られ、『古尊宿語要』卷二「并州承天高禪師語」、『禪学叢書』之一、九七頁下)、また『碧巖錄』第三八則・本則評唱(大拙校訂本、上一六九頁)では雲門文偃の語ともされ、疑問が残る。「鯤」と「鯨」はともに大魚。梁山縁觀等の言葉では「獐龍」とされるが、本文は雲門の語の影響を受けたか。『雲門広録』卷上、「上堂、云く、『解よく問話する者有らば、一問を置き將まち來れ。』僧出でて礼拝して云く、『請う師、鑑ませよ。』師云く、『釣つを抛なちて鯤鯨を釣らんとするに、箇の蝦蟇がまを釣得す。』」(T四七・五五一中)。

○後來打破漆桶、將謂有什ん奇特、元來只消个「五帝三皇是何物」。 「將謂」は、(事實に反して) 思い込む。「消」は「必要とする」。「只消」で「ししか必要ない」の意。馬祖の「日面仏、月面仏」という言葉の裏には、なにか特別

すばらしい真意があると思つていたが、実際に無明を打ち破つてみると、なんと「五帝三皇是れ何物ぞ」の一句で十分だったのだ。「漆桶」は真つ黒なるし桶、無明を喩える。『圓悟語録』卷一三、「一日、忽ちたちま官員有りて問道する次で、先師云く、『官人、爾小艶詩に道うを見ずや、頻りに小玉と呼ぶも元と事無し、只だ檀郎の声を認得せんことを要す、と。』官人却つて未だ暁らざるに、老僧聽得して忽然ちに漆桶を打破す。」(T四七・七七五中)。

○須是自家退歩看、方始見得它落処。『自家』、「家」は意味のない名詞接尾辞で、二字で「自ら」の意。「退歩して看る」とは、自己自分の心において参究すること。文字面に拘泥していても雪竇の意図はわからない。自らの心の上で修行してこそ勘所が分かる。『圓悟語録』卷八、「諸人と山僧と、各各一段の大事有りて、今古に輝騰し、廻かに知見を絶し、……若し能く退歩して己に就き、情塵意想、記持分別・露布言詮・聞見覺知・是非得失を脱却し、直下に豁然たらば、瞥地に便ち古仏と同じ。」(T四七・七五〇上)。四卷本『大慧普說』附『大慧法語』「示了然居士」、「今の学者、退歩して自己脚根下に向いて提撕するを肯んぜず、多く是れ師家の口頭に就きて取辦し、將謂えらく、以て口伝心授すべしと。」(『禅学典籍叢刊』第四卷、三三二頁上)。

○引興陽問答三皇五帝因縁了。『引了』は編者の視点によるト書き。張本にはその内容を全て引用する。以下に張本本文と、その解釈を示す。張本『碧巖録』第三則・頌評唱、「豈に見ずや、興陽の剖侍者、遠録公の問うに答う。『娑竭、海を出でて乾坤震う、觀面に相い呈する事、若何。』剖云く、『金翅鳥王、宇宙に当たる、箇中、誰か是れ出頭する人』遠云く、『忽し出頭するに遇わば、又た作麼生。』剖云く、『鶻、鳩を捉うるに似たるも君信ぜず。鶻鷹の前に驗して始めて真を知る。』遠云く、『任麼くんば、則ち節を屈して胸に当て、退身すること三歩せん。』剖云く、『須弥座下の烏龜子、重ねて点額に遭うを待ちて回る莫かれ。』所以に『三皇五帝亦た是れ何物ぞ』というなり。」(T四八・

一四三上)。「興陽剖侍者」は興陽清剖、大陽警玄の法嗣、『天聖広灯録』卷二五等に立伝する。「遠録公」は浮山法遠(九九一—一〇六七)、葉県帰省の法嗣。『建中靖國続灯録』卷四、『禪林僧宝伝』卷一七等に立伝する。史事に通じたため、「録公」と称される。「娑竭」は、娑竭羅龍王。「金翅鳥」は迦樓羅ともいわれる伝説上の大鳥で、常に龍を捕えて食すとされる。「屈節」は、一般には節義をまげること。『不二鈔』は「節」を手指の節とし、「叉手」の意ととる(四二頁下)。「宏智録」「聯灯会要」等には「屈節」を「叉手」につくる。「点額に遭いて回る」とは、龍門を超えようとした魚が、額をぶつけて引き返すこと。「須弥座」は須弥山にかたどり、仏像を安置する壇。ここでは自らの法座を喻える。法遠問う、「龍王が一たび海から出れば、世界は震撼いたします。目の当たりにありありと示されている真理とはどのようなものでしょうか(私がいま現に、このように示している真理の在り方を、どのように見られますか)」。剖侍者答える、「金翅鳥の王がここにいると、いったいどの龍王が顔を出そうと言うのか(この私の前で分かったふりをする愚か者はどいつだ)。「もし本当に顔を出す者がいたら、いかがなされます(ならば、現に真実を示している私に、いかに対応されますか)。「ハヤブサはとくにハトをつかまえてしまったというのに、まだわかっていない。鬪髑を目の前にして検分しなければ、自分が死んだことも分かるまい(おまえはすでに間違っているというのに、自分ですら気が付いていない)。「さようであれば、おとなしく身を引くよりほかありません。」「わが法座の下にいるのろまなカメよ、二度失敗してからやっと引き返すようなことをするでない。」この故事によって上文に「須是^{すべ}らく自家^{みずか}ら退歩して看^みるべしとするのを説明する。あれやこれや言葉を重ねるのは無用である。すべては自己の本分にもとづいて理解しなければならぬ。だから雪竇は「三皇五帝も物の数ではない」と言ったのだ。この剖侍者の問答は他に『天聖広灯録』卷二五、『宏智録』卷二、『聯灯会要』卷二八、『嘉泰普灯録』卷二などにも

録されるが、いずれも文字に違いがある。このうち、問答の相手を法遠とするのは『碧巖録』だけである。

○此乃禪月題《公子行》詩……『晚唐の詩僧、貫休（八三二—九一一）の詩。『祖庭事苑』卷三・「波波稜稜」の条、「雪竇の禪録、凡そ語句を作すは、未だ嘗て妄りに発せず、必ず依拠有り。……又た『五帝三皇是れ何物ぞ』、『誰か道う、黄金は糞土の如しと』、『白月宮中の天馬駒』の如きは、皆な禪月歌詩中の語なり。」（Z一一三・七九頁上—下）。貫休は、字德隱、婺州蘭溪の人、俗姓は姜氏。五代十国前蜀の高祖王建より「禪月大師」の号を賜る。『宋高僧伝』卷三〇、『唐才子伝』卷一〇等に伝あり。この詩は、貫休の詩集『禪月集』巻一で「少年行」とし、宋張唐英『蜀檮杌』巻上、『唐詩紀事』卷七五等では「公子行」とする。以上の文献で「仙花」はみな「鮮華」につくる。『蜀檮杌』巻上の記事からは、この詩の背景を知ることができる。いわく、「前蜀永平二年（九一一）二月朔、龍華禪院に遊ぶ。僧貫休を召して命じて坐せしめ、茶葉綵段を賜い、仍お近詩を口誦せしむ。時に諸王貴戚皆な坐を賜う。貫休、之を諷せんと欲し、因って「公子行」を誦して曰く、『錦衣鮮華にして手に鶻を撃げ、閑行する氣貌に輕忽多し。稼穡の艱難総て知らず、五帝三皇は是れ何物ぞ。』（王）建称善す。貴倖皆な之を怨む。」（傅璇琮・徐海榮・徐吉軍主編『五代史書彙編』、杭州出版社、二〇〇四、六〇七五—六〇六七頁。傅璇琮主編『唐才子伝校箋』、中華書局、一九八七—一九九五、第四冊四三七頁参照）。詩の大意は、「貴族の師弟が華やかな衣服をまとい、手に愛玩用のハヤブサを掲げ、そぞろ歩きする様子はたいへんに輕薄である。農耕の苦勞など全く知らず、三皇五帝が何者であるかも知らない」。貫休原詩の最後の一句は「基礎教養としての三皇五帝も知らないほどに無知である」の意と解するのが自然であるが、雪竇頌古および『碧巖録』では、「三皇五帝も眼中に置かない」の意で使われている。

○多少人向蒼龍窟作活計〓「多少」は「おおくの」。「作活計」は、生計を立てる、暮らす。ここでは、そこにこだわ

る、そこに労力を費やすの意。多くの人は、「日面仏、月面仏」という言葉の裏になにか隠された真意があるだろうと考え、それを捜したそうとばかりしている。『一夜碧巖』第八則・本則評唱、「本則翠巖眉毛の話について」如今の人、問著せば、便ち句中に向いて咬嚼し、眉毛上に活計を作す。」（大拙校訂本、上四〇頁）。『一夜碧巖』第一八則・頌評唱、「本則忠国師無縫塔の話について」多少の人、国師良久の処に去きて活計を作す。若し恁麼くんば、一時に錯り了れり。」（大拙校訂本、上八七頁）。

○直饒頂門具眼、肘下有符明眼衲僧、点破天下衲僧、到這裏也莫輕忽。張本に「直饒是頂門具眼、肘後有符明眼衲僧、照破四天下」とする。「頂門の眼」は摩醯首羅天（大自在天、Mahesvara）の額にある第三の眼。一切を看破する眼力を喩える。「肘下（後）の符」とは、ひじの後ろに付けた符。袖の中に肌身離さず隠し持つお札。「点破天下」は珍しい表現、ここでは張本の「照破」と同様の意味とする。智慧の目によって天下を見通すこと。たとえ神通力を備え、靈験ある符を持ち、天下を見通す眼力を具えたような優れた禅僧であろうとも、ここに至っては油断してはならない。『一夜碧巖』第二六則・本則評唱、「頼に百丈の頂門に眼を具し、肘下に符有り、四天下を照破し、深く来風を辨ずるに値う。」（大拙校訂本、上二二四頁）。四卷本『大慧普説』卷三「方敷文請普説」、「其れ或いは未だ然らざれば、更に一頌を聴け。頂門豎に亅す摩醯の眼、肘後斜めに懸く奪命の符。鉄圜を一撃して百雜碎にするも、箇中全く工夫を費やさず。」（『禅学典籍叢刊』第四卷、二二九頁下）。また以下の杜甫の詩からは、「肘後の符」に「道士の持ち物」としてのイメージが定着していたことがわかる。杜甫「寄張十二山人彪三十韻」詩、「肘後の符応験し、囊中の葉未だ陳べず。」（蕭滌非主編『杜甫全集校注』、人民文学出版社、二〇一四、一六六七頁）。以下『太平広記』の二例には、道者が「肘後」に珍貴な丹葉をしのばせるという物語の定型を見ることが出来る。『太平広記』卷五七・太真夫人、「夫

人、肘後の筒中に於いて葉一丸を出だすに、大なること小豆の如し。即ち之を服せしむ。」(中華書局、一九六一、三五〇頁)。同卷四〇〇・成弼、「更に還丹を求むるに、道者与えず……(成) 彌まよ滋ま怒りて、則ち其の頭を斬る。衣を解くに及びて、肘後に赤囊有り、之を開かば則ち丹なり。」(三二二五頁)。また、晋の葛洪に簡便な救急医療書として『肘後要急方』四卷の著がある(『晋書』卷七二・葛洪伝、中華書局、一九七四、一九一三頁)。「照破四天下」については、以下の二例を参照。『景德伝灯録』卷八・浮盃和尚章、「婆、趙州の此の語を聞きて、合掌して歎じて云く、『趙州は、眼、光明を放ち、四天下を照破す。』」(禪文研本、一三〇頁上。入矢監修『景德伝灯録』三、二二二―二二三頁参照)。「一夜碧巖」第八八則・示衆、「頂門に光を放ち、四天下を照破するは、是れ衲僧の金剛眼睛。」(大拙校訂本、下一一六頁)。

後記

本稿は東京大学東洋文化研究所「中国禅語録の研究」研究班での会談の成果をまとめたものである。第三則は当初、研究会メンバーである石野幹昌氏が資料作成を担当し会談が行われた。その後、土屋が会談資料を基に草稿を作成し、研究会での討議を経て、最終稿をまとめた。このような経緯のため、文責は土屋に帰すものとする。訳注稿の発表にあたっては、引き続き研究班班長である東洋文化研究所馬場紀寿准教授に多大なご支援をいただいた。また原稿の作成にあたり、駒澤大学小川隆教授に多くのご指導をいただいた。本稿は内容の多くを研究会での討論に負っている。参加者各位に感謝の意を申し述べます。本研究はJSPS科研費25770016の助成を受けたものである。

《一夜碧巖》第三則譯註

土屋 太祐

本文是《一夜碧巖》第三則《馬祖日面佛月面佛》的譯註研究。第一則、第二則譯註已在本雜誌上發表，本文是第三篇研究成果。第三則以馬祖道一臨終前的對話為本則，本則中馬祖所說“日面佛月面佛”一句是整段對話的關鍵，但也頗為難解。雪竇重顯的頌古便圍繞此句展開對公案的闡釋。圓悟克勤的評唱則解釋本則與頌古的內容，同時也談到當時流行的禪風，並加以批判，亦可視為珍貴歷史資料。